第 52 回インナーゼミナール大会

研究計画書

ゼミ名	宮川ゼミ	チーム名	味噌汁‘s
タイトル	人の為に行動すると幸せになれるのか		
テーマ群	a)理論・情報		
メンバー	小川岳也、佐藤栄佑、坂口大陽、山下千尋、後藤柊也		
研究計画内容	「研究背景」 私は誰かのために行動するという事に疑問を持っている。例えば、友達へのプレゼントや、誰かのために時間を割くような行動。その行動は、どのような感情をもたらしているのか。誰かのために行動するというのは他人の幸福度だけでなく、助けた本人も幸せになれるのか。これを明確にすべく、アンケート・実験を行い明らかにしていく。 「研究内容」 Dunn,Akin,Norton(2008)の既存研究では、寄付と幸福度の関係をテーマにしていたが、大学生には身近でなく、イメージしにくいものであると考え、利他的行動の内容を変更しアンケートを用いて、利他的行動が幸福度にどのような影響をもたらすのかを検証した。その結果を回帰分析により分析したところ、他人のために時間を使うと逆に幸福度が下がってしまうというものになった。しかし、この結果は利他的行動がアンケートだけではイメージしにくい事や幸福度は他の要因も絡んでいることも考えられる。そこで、私たちはアンケートよりイメージしやすいものに改良し、新たに実験を行う事にした。実験内容は、ゲーム理論の実験で頻繁に用いられている独裁者ゲーム(Hoffman,McCabe,Smith(1996))をもとにアメをお金に見立て 1 万円のうちいくら寄付するかの ゲームを行った。また、人の幸福度を高めるには寄付に+α何かある方がいいのか調べるため、「苦労して手に入れたものを寄付する」「寄付後に小さな見返りがある」「寄付後にお礼を言ってもらえる」という 3 つにコントロールグループを加えた 4 つのグループで独自のランダム化比較実験を行っている。 「期待される効果」 この研究により、利他的行動はどのような要因によって、引き出すことができ、幸福度が上がるのかを明確にすることができる。それにより、大学生が寄付やボランティアなどの社会活動を促進する手法を見出せることが出来る。 「参考文献」 Hoffman,McCabe,Smith(1996)“Socid Distance and other-regarding behavior in dictatorgames”American Economic Review 86.3 PP.653.660 Dunn,Akin,Norton(2008)“Spending Money on others promotes happiness”Science 319		